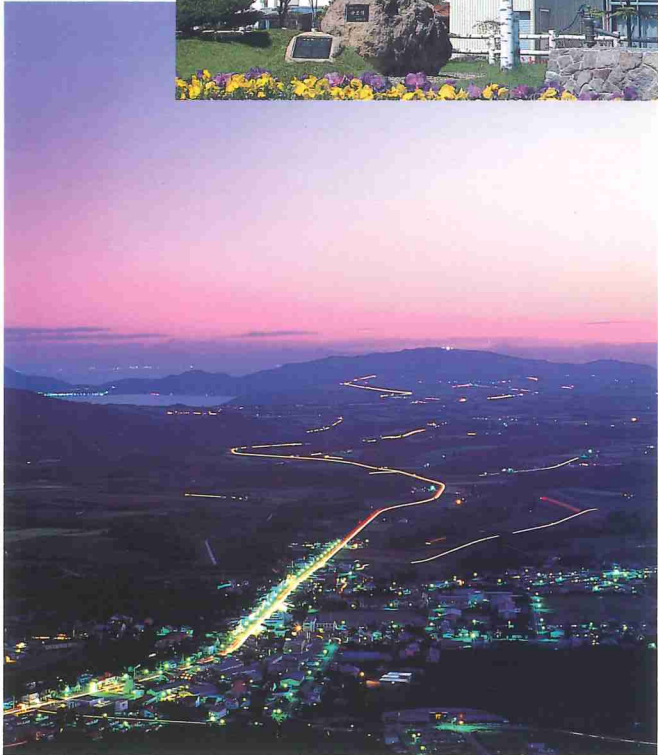


# 赤い靴公園

四季の里 留寿都に  
 新しい名所が生まれました  
 童謡「赤い靴はいてた女の子」の  
 子を思う母、母を慕う子  
 ゆかりの地・留寿都の里に  
 建てられたブロンズ像  
 それが「赤い靴」母思像です



襦負山より望む留寿都市街

あか くつ 野口雨情 作詩  
 赤い靴 本居長世 作曲

あか くつ 赤い靴 はいてた  
 おんな 女の子  
 いじん 異人さんに つれられて  
 い 行っちゃった

いま 今では ちよいめ 青い目に  
 なっちゃって  
 いじん 異人さんの お国に  
 いるんだろう  
 いじん 異人さんに つれられて  
 い 行っちゃった



あか くつ 赤い靴 見るたび  
 かんが 考える  
 いじん 異人さんに 逢う 逢たびに  
 考える

日本音楽著作権協会（出）許諾第9473074-401号



赤い靴の里ルスツ

## 赤い靴公園

留寿都村役場 ☎0136(46)3131

# 童謡「赤い靴」の母思像 きみちゃん

Kimi-chan



留寿都  
 RUSUTSU



## 「きみちゃん」

## 幻の赤い靴

## —きみの面影をもとめて—

菊地 寛

見上げると、羊蹄山の頂がうっすらと雪化粧をしています。留寿都の里にも、移ろいゆかんとする季節の足音がそこまで近づいてきているのです。

燃えたつ紅葉から、白一色の世界へ。ときにそれは夢ふくらむ想いをはぐくみますが、北国にあっては、酷寒という言葉に象徴されるように、雪と寒さと闘わなければならない厳しい現実をも描き出します。

開拓が緒についた明治の頃、ここ留寿都の一画に“平民農場”がうぶ声をあげました。人々は深い原始林を切り開いて、ここに理想郷をつくろう、と入植したのです。一人の若い女性がいました。岩崎かよ、富士山の眺めが美しい静岡県の不二見村出身でした。入植仲間の、誠実でたくましい男性と結ばれ、農作業と家事に懸命に汗を流す日々でしたが、細面の横顔にふと寂しさをのぞかせます。故あって、わが幼な子きみを、見も知らない外国人に託しての開拓地入りだったのです。

しばれのきつい冬の夜、雪に埋もれる開拓小屋。

「母ちゃん、母ちゃん……」

遠くに聞こえているのは女の子の声のようだ。か細く、途切れ途切れ。耳をすませて確かめようとするかよ。

くあれはきみだ。きみに違いない

「幸せにネ。大きく育つのだよ」

く遠い外国へ行ってしまっても、いつか必ず会えるはず。いえ、きっと会いに行きます。そのときまで待っていておくれ

戸板をたたかような羊蹄おろし。吹雪のうなりにかき消されそうになりながらも、誓いの灯をともし続けるかよでした。

ひと冬、またひと冬。

激しい労働にもかかわらず乏しかった秋の実り。農場の暮らしは楽にはならず離農者が相次ぎます。凍った大地は、人々になお試練を与えたのです。かよたち一家も札幌へ出ました。

そこで出逢ったのが、若き日の野口雨情でした。自分も恵まれなかったこの放浪歌人は、別れ別れになっているかよときみの願いを胸に刻みました。



童謡「赤い靴」  
母恩像  
1991.10.  
金野真夫書

赤い靴はいた女の子

異人さんにつれられて行っちゃった

後年、雨情が発表した詩に、曲がつけられました。

この旋律に導かれるように、私は旅に出ました。北海道から本州へ、そしてとうとうアメリカへも。きみの面影をもとめての旅でした。今も、どこかで元気であるかもしれない。そんな期待も胸に抱いておりました。

しかし、望みは断たれました。わずか九歳で、この世を去っていました。当時は不治の病といわれた結核でした。東京に在った教会の孤児院で、ひっそりと短い生涯を閉じていたのです。

きみを引き取って育てていたのは、子供のいないアメリカ人宣教師夫妻でした。ところが、帰国命令。きみの病状は、1ヵ月もの船旅に耐えられそうにもなかったのです。

「早く治って、きっとアメリカへ来るんですよ」

育ての母となったエンマ・ヒュエットは、きみの枕辺で、涙ながらに別れを告げたのでした。

父を知らず、生みの母とも、育ての母ともいっしょに暮らすことができなかつたきみ。病いの床で母を慕う嗚咽は、風に乗って海を越えはるか遠くまで運ばれたのかもしれない。

私はここ留寿都の農場跡にも立ってみました。かよの涙をふくんだような、大きな石塊が遺されていました。往時を想うと、わが子の幸せを願い続けた母親の気持ちがしみじみとしのばれました。陽焼けした顔で迎えてくれた留寿都の人々。その温かさに励まされて、きみの足跡をたどったものの、哀しい結末でした。私の“赤い靴”は幻だったのです。

いや、そうだったのでしょうか。

明治から大正、昭和から平成へ、と時は矢のように流れてゆきます。そんな時代を越えて、童謡「赤い靴はいた女の子」は歌い継がれています。

子を思う母、母を慕う子。ゆかりの地・留寿都の里に建てられたブロンズ像。その姿は、歌に秘められ、歴史のひだに織り込まれている熱く、優しい心の存りようを、永遠に語りかけてくれることになったのです。

(北海道テレビ放送・報道制作局長)

平成3年11月